

## 母が遺す宝もの

春雨の窓下、すばらしい随筆に出会う。張さつき著『母の贈りもの』（未来社刊）。さつきさんは東京で独り暮らしの母が気になり電話する。声がかさかさ、風邪でもと尋ねる。「今日初めて声を出したからという。胸がきゅつと痛む」。父は京大哲学教授、急逝。年金もなく、母は宇治茶をとりよせ知人に売り歩く。

ある歳としの暮れ、娘にせめて正月だけでもと、市場であれこれ少しずつ買う。みかんも少し。亡夫への水仙を「花屋の前で長いこと迷い、ため息まじりに買う…：そうして用意した正月料理を友人が来たらだしてくれただ。みかんをだす。母がちよつとちゅうちよしたことを覚えてる…」。――

母が娘に残すともなく残している宝ものが、本のあちこちに光っている。聖語――「ひとは神と富と共に仕えることはできない」。母は娘によく言ってきた。貧乏に心まで負けないでね。

年に一度、さつきさんは母に逗留とまりやうして頂く。交際狭くない母の電話は多い。「もう

年でね、昨日も茶碗割ってしまつて、いいえ、安物ですけどね……。ちがった友とは「上げ膳下げ膳まるで大名みたい、ええ、○日に帰ります。はい、それまで我慢してここにいますよ……」

頭に来る。娘―「ねえ、我慢している毎日なの？」母―「そう言った？あら、ごめんね」

世田谷に住んで古い。「母は誰かによくしてもらう度に元気を取り戻す……恋人を待つ心境で週一回のヘルパーさんの来訪を指折り数えて待っている……」。

母の手紙―ありがたい毎日。おかげで元気になりました。どうしましょう。皆にお世話になるばかりとは……。

(一九九七年三月七日)